

豊かに蒔く奉仕を現す“手紙”

Ⅱコリント 9・6-15 (要旨)

説教者 原田憲夫



今日の「鍵の語=キーワード」は9章12節の「奉仕の務め」です。今日の状況を踏まえ、今の時代に遣わされた「キリストの手紙」として私たちの役目を覚えながらみことばを心に思い巡らしましょう。

○「奉仕」は、“祭司”に用いられた言葉。

“祭司”にとっての奉仕は「神の名を置く家」(神の宮)での「神-礼拝の務め」でした。

(注)この奉仕(Gr. Λειτουργία)という言葉から「礼典/礼拝式(リトージ)」という言葉が派生。

今日、「神の宮である私たち」が行う「奉仕の務め」、それは「礼拝-献げる行為」です。

パウロは<動機>を問います。

【1】喜んで与える (7)

・「喜んで」と正反対なのが、「いやいやながら、強制されて」です。そこには文句や不平はあっても「喜び」はありません。

・「喜び」を引き出すのは、「心で決めたとおりに」(7)です。

▶「心で決めたとおりに」には、「いやいやながら」「強いられて」といった消極的な、否定的な意味合いはありません。

すでにパウロが8章で語ったように、「自ら進んで」「力に応じ、いや力以上に」(8・3)という意味合いが込められています。

このような動機でなされる「奉仕の務め」には「喜び」があります。

私たちの「奉仕の務め」はいかがですか？

【2】「惜しみなく分け与えた」(9)

「惜しみなく分け与えた」→詩篇 112-9 の引用。

→<レプタ銅貨 2枚 献げた 貧しいやもめ>ルカ 21・1-4

金持ち：「額」しか見えず傲慢になりました。

貧しいやもめ：彼女の献げた2レプタ-きわめて少額-は、当時の献げる規準とされた 1/10 どころか、10/10、すわち彼女の全財産だったのです。キリストはこのやもめの「奉仕」を称賛しました。

▶このように「奉仕-献げること」とは、「惜しみなく与える心」(5,11,13)なのです。

「あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。」(11)

▶それは見返りを求めてなす「行為」とは一線を画します。

ところが、不思議なことに、神様は献げる者に対して「さらなる祝福」をもたらされるというのです。→8節、11節。

(例) やなせたかし氏の話：見返りを期待しないでただ愛を込めて描き続けた結果、アンパンマンが(物心両面で)今の自分を助けてくれている。

ここに「豊かに(種を)蒔くものは、豊かに刈り入れる(収穫する)」との原則が現れます。

【3】「奉仕の務め」-「神の恵み」によって(8)

パウロが「奉仕-献げる」ことを語る時、必ずその背景に「神の恵み」が裏付けとなっていることに気づかされます。

つまり、私たちの罪を贖うために神はそのひとり子を惜しみなく差し出されたことです。

*「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します」(15)。

▶このように、私たちの「献げる/与える」という「奉仕」は、御子を惜しみなく与えられた「神の愛」への応答です。「奉仕の務め」は、「神の恵み」に対する「感謝の心」なのです。

ですから、あの貧しいやもめのように実に積極的で、大胆な、「豊かに蒔く奉仕」を生み出すことができるのです。

その「奉仕」に「惜しみなく与える神の恵み」が美しく映し出されるのです。

【勧め】

「神の宮」である私たち一人ひとりの「奉仕の務め」は、大きな感謝と喜びから生まれます。たとえ献金であれ、会堂掃除であれ、配布物の印刷であれ、教会のお知らせを近隣の方々に配ることであれ・・・こうした「奉仕の務め」は一人ひとりの「神への感謝の心」そのものです(11,12,15)。「神をあがめる」礼拝なのです。

▶神は今、この時代に、「神の宮である私たち一人ひとり」にふさわしい「賜物」を与え、「奉仕の喜びの機会」を与え、大胆に、「豊かに蒔く奉仕」を現す「キリストの手紙」であることを忘れないでください！

▶Ⅰコリント 10:31「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」

(祈り)